

機関番号：13501

研究種目：基盤研究(C)

研究期間：2007～2010

課題番号：19530686

研究課題名(和文) 「身心の健康と教育」に関する基礎的・歴史的研究  
— 「学校衛生」の展開を軸に研究課題名(英文) Historical Research on Health and Education  
: the Birth of School Hygiene

研究代表者

寺崎 弘昭 (TERASAKI HIROAKI)

山梨大学・教育人間科学部・教授

研究者番号：60163911

研究成果の概要(和文)：本研究の目的は、「学校衛生」の歴史的展開を明らかにすることである。日本においては、欧米の「衛生」概念が輸入され、それが「学校衛生」への関心へと展開してきた。本研究で、われわれは、1904年・1907年に「学校衛生国際会議」が開催されていたことを見出し、その動向のなかに「精神衛生」化のプロセスを跡づけた。また、2002年台湾学校衛生法、『学校衛生』(1921-1949、帝国学校衛生会)誌の全目次に関する分析を含む、成果報告書(87頁)を刊行した。

研究成果の概要(英文)：

We attempted to clarify the historical development of school hygiene which regulated children's physical and mental health and education in schools.

In Japan, European concept of hygiene was imported in school government at first in the early Meiji period (1868-1912), which evolved into much interest in school hygiene expressed by Japanese school hygiene magazines. However, it also was based upon European trend. Through our research, we have successfully found out international academic agency on school hygiene called International Congress of School Hygiene which was held in 1904 and 1907. We could trace the process of mental hygienization in such sources.

We published final report (March 2011, 87 pages) including our analysis of the brief history of the European concept of physical and mental health, the School Hygiene Law of 2002 in Taiwan, and all of contents of "School Hygiene (Gakko Eisei)" (1921-1949).

交付決定額

(金額単位：円)

	直接経費	間接経費	合計
2007年度	1,700,000	510,000	2,210,000
2008年度	1,100,000	330,000	1,430,000
2009年度	600,000	180,000	780,000
2010年度	200,000	60,000	260,000
年度			
総計	3,600,000	1,080,000	4,680,000

研究分野：教育思想史

科研費の分科・細目：教育学・教育学

キーワード：教育学、健康、衛生、学校

## 1. 研究開始当初の背景

(1) 今日の教育において、子どもの身心の健康に関わる位相での課題が喫緊の課題としてクローズ・アップされてきている。それは、スクール・カウンセラーの導入、教師におけるカウンセリング・マインドの必要性の強調、子どもにとっての癒しの場あるいはケアの場の必要性の提唱、さらには「食育」(食の教育)の提言などといった事例に端的にあらわれている。こうした事態は、今日の子どもがその人間関係を含む環境のなかで、とくに体と心の双方にまたがった健康という基底の部分に触まれており、教育がその基底から組み立て直されなければならないことを強く示唆している。すなわち、今日改めて、教育基本法第一条(教育の目的)にある「心身ともに健康な国民の育成」に着目し、「身心の健康と教育」を包括的に捉える視座が求められている。

(2) 日本、イギリス、中国・台湾の教育史を専門とする者が、同一機関の同一講座に所属するという利点を生かし、既に、学内戦略プロジェクトにより、研究に着手していた。

## 2. 研究の目的

(1) 本研究は、「身心の健康」への配慮を学校教育において定着させた「学校衛生」という概念と施策に着目し、日本における「学校衛生」とその思想の展開に関する歴史的な研究を軸にして、現代社会における「身心の健康と教育」のあり方を学校の役割を中心に見通そうとするものである。

「学校衛生」とは、もともと学校管理・学校経営の一領域であり、今日のいわゆる学校保健あるいは養護教育という用語が想像させる範囲をはるかに超えるものであった。学校衛生の重要性をすでに明治 10 年代後半に提

唱していた辻新次や学校衛生学の泰斗・三島通良などの論(たとえば三島通良『学校衛生学』明治 26 年)を瞥見しただけでも、「学校衛生」が、感染症予防のための清潔観念の普及、精兵を養成するための(あるいは、健全な産業人を育成するための)体力・体格の向上策、3 学校医・保健室の配置などを含むことは当然として、さらに、授業法と学科時間、就学年齢、学校立地、校舎の構造(採光、換気、採暖)、飲料水、便所、机、腰掛け、教科書の活字の大きさ、黒板などの教具、身体姿勢、身体動作等にまで及ぶ、きわめて広汎な教育環境の整備・改善を内容とするものであったことが明らかになってくる。すなわち、それは学校教育のあり方(学校の時空)を根本において律し指導する概念なのであった。

そのような内容をもつ「学校衛生」は、理論の面においては、明治の初期にあってはアメリカ・イギリスの学校管理論書の受容を基礎として出発し、明治の中期以降にあってはドイツの学校衛生学の受容によって展開されたものであり、他方、現実的な施策としては、日本国内で実施されていったことはもとより、台湾をはじめとする植民地にも適用されたものであった。

(2) ところで、「学校衛生(school hygiene)」という言葉は、すでに旧聞に属するとき響きをもった用語であり、既に歴史的使命を終えたものに思われるかもしれない。また「衛生」と今日的「身心の健康」とがどう繋がっているのか疑問に思われるむきもあるかもしれない。しかしながら、顧みるに、“hygiene”という言葉はギリシア語の「ヒュギエイア(人間の身心の健康)」に由来する言葉であり、かたや「衛生」は「養生」と共に『荘子』の中に現れていた「身心の健康」そのものを意味する言葉で、文字どおり「生を養う」ことであった。こうしたはるか古代に淵源をもつ

“hygiene”、「衛生」といった言葉が、きわめて長期的な歴史の波動のなかで意味変容を遂げつつ、その延長上に、19世紀以降の「学校衛生(school hygiene)」を誕生させた。すなわち、アメリカ教育史家ソル・コーエン(Sol Cohen)がその著書(*Challenging Orthodoxies: toward a new Cultural History of Education*, P. Lang, 1999)で明らかにしたように、20世紀を通じての教育言説への「精神衛生(mental hygiene)」的配慮の浸透によって、「アメリカ教育のmedicalization」=「衛生化」(hygienization)へと展開してきたのである。日本においてもほぼ同様の事態が静かに進行してきたが、同時にまた、そこに日本的な特殊性も存在したことは言うまでもない。

したがって、「学校衛生」といういささか古めかしく聞こえる言葉を敢えて方法概念に据えて、学校が担う「身心の健康と教育」の具体相としての「学校衛生」がここ日本において歴史的にどのように展開してきたかを包括的に明らかにすることは、今わたしたちが「身心の健康と教育」のどのような歴史的局面に位置しているのかを見極め、さらに教育の新しい組み立てを展望するために、必須のかつ好便な見取図を提供してくれる作業だと言わねばならない。

それゆえ、古代にまで遡る衛生(養生)思想の水脈を視野に収めながら、日本の「学校衛生」の特質を長期波動の衛生思想史のなかに位置づけ、イギリス・ドイツから移入された学校衛生論との比較を精細に行い、さらに植民地における「学校衛生」の適用の実態をも明らかにする、包括的な研究による基礎的知見を得ることがもとめられる。

### 3. 研究の方法

#### (1) 学校衛生論受容の研究

日本における学校衛生論(およびそれを包括する学校管理論)の受容の特質を、その種本となったイギリス・アメリカの学校管理論、ドイツの学校衛生論の原著との対比において、とくにそれぞれの国での歴史的・文化的文脈をふまえながら精査・検討した。学校管理論としては、日本では、箕作麟祥『学校通論』(明治7)、西村貞『小学教育新編』(明治14)、伊沢修二『学校管理法』(明治15)、生駒恭人『学校管理法』(明治17)など。また、学校衛生論としては、三島通良の『学校衛生学』(明治26)や三宅秀『教育衛生講義』(明治29)などを、蒐集・分析した。

#### (2) 「学校衛生」関連諸雑誌の系統的蒐集と分析

日本における学校衛生論の展開とその特質を把握するための中心的素材として、学校衛生研究会『学校衛生』(明治36~38)、および帝国学校衛生会『学校衛生』(大正10~昭和24)、大日本学校衛生協会『日本学校衛生』(大正2~昭和16)という、戦前日本の学校衛生を主導した諸雑誌の蒐集に努め、重要記事のピックアップと分析を行った。

#### (3) ヨーロッパ学校衛生論史の研究

1891年にロンドンで第7回会議が開催された世界衛生会議、1904年にニュールンベルクで第1回会議が開催された学校衛生国際会議等、19世紀末から盛んに開催された欧米における衛生関連会議の動向についての分析を進めた。それらの会議録の目次を分野別に整理し、特に「学校」に関わる視点の広がりや深化を追跡し、「心理衛生」「精神衛生」分野の導入等、「学校衛生」をめぐる関心の変化を分析する素材を整理し得た。また、そうした19世紀から20世紀にかけての「学校衛生」(school hygiene)の歴史的位置を見定めるた

めに、18 世紀以前の「健康・衛生」(ヒュゲイア)概念の変遷について、身心概念・「ウェルビーイング」概念との関連で検討した。

#### (4) 台湾学校衛生調査研究

旧植民地(台湾)における学校衛生の適用の実態を探る。この件に関しては、内務行政における衛生行政に多大の関心を払った後藤新平と、学校管理における学校衛生を重視した伊沢修二が、ともに台湾総督府の要職にあったことを重要な手がかりとして考慮しつつ、現在の台湾における学校衛生の実態を現地調査した。

### 4. 研究成果

蒐集した史資料の整理と分析を行い、最終報告書『「身心の健康と教育」に関する基礎的・歴史的研究 — 「学校衛生」の展開を軸に』(平成 23 年 3 月刊行、全 87 頁)としてまとめ刊行した。その主な内容は、以下のようである。

#### (1) ヨーロッパ学校衛生論史の研究

1891 年にロンドンで第 7 回会議が開催された世界衛生会議、1904 年にニュールンベルクで第 1 回会議が開催された学校衛生国際会議等、19 世紀末から盛んに開催された欧米における衛生関連会議の動向を分析し、「学校」に関わる視点の広がりおよび「心理衛生」分野の導入という特徴を別出した。つまり、学校教育の「衛生化」特に「精神衛生(mental hygiene)化」の過程をクローズ・アップさせた。

と同時に、この「衛生(hygiene)」概念が身体と精神(心)を包括するプロセスの歴史的特質を解明するため、18 世紀以前のヨーロッパにおける身心概念を整理し直して、19 世紀に登場する「学校衛生」概念の特色を検討するための視座を提示した。

#### (2) 雑誌「学校衛生」目次の整理とその分析

日本における学校衛生論の展開とその特質を把握するための中心的素材として、大正九(1920)年に結成された「帝国学校衛生会」が翌年から刊行し続けた機関誌『学校衛生』の全目次を提示し、その歴史的特色を示した。日本における「学校衛生」関連諸雑誌の系統的蒐集と分析作業の一成果である。

#### (3) 台湾学校衛生法等の分析

台湾における学校衛生の歴史と現状を分析し、特に 2002 年 2 月 6 日に公布された学校衛生法および施行規則に焦点を絞って、その訳出を提示し、その内容およびその後の展開について分析した。台湾の小・中学校では、学校目的として「健康」を明示し、ナース資格をもつ教員を要とした教育計画が施行されていることを、台北周辺の学校調査により確認した。

### 5. 主な発表論文等

[雑誌論文](計 2 件)

①Hiroaki Terasaki, Education and Scholē : towards an Anthropology of Life Design and Well-being, *Minpaku Anthropology Newsletter* (National Museum of Ethnology Osaka), 2009-12, 2009, 3-4、査読無

②寺崎弘昭、からだどころといのちの概念史一ひとつの素描、山梨大学教育人間科学部紀要、第 9 巻、2008 年、236-246、査読無

### 6. 研究組織

#### (1) 研究代表者

寺崎 弘昭 (TERASAKI HIROAKI)  
山梨大学・教育人間科学部・教授  
研究者番号 : 60163911

#### (2) 研究分担者

該当なし

#### (3) 連携研究者

石川 啓二 (ISHIKAWA KEIJI)  
山梨大学・教育人間科学部・教授  
研究者番号：60134417

阿部 茂 (ABE SHIGERU)  
山梨大学・教育人間科学部・准教授  
研究者番号：20184210